

条件下に成立した歴史的事実の正確な把握をおろそかにしてはならない。本書の詳細な資料調査・実地踏査はそうした著者の姿勢を物語るものであろう。ただし、全体として見るとき断片的事実の集積にとどまって、それを歴史的に通観し統合する側面がやや不足している嫌いはないか。明治十年代の諸制度揺籃期に、学制・軍制・医療制度がどのように整備されていったか、そしてその社会全体の枠組の中で個人はいかに規定されていったかといった視点が必要なのではないか。日頃私自身区々たる調査に汲々としているので、自戒の意をこめて敢えて一言する。

第三に、小島憲之氏は日本漢詩文研究の権威であり、特に平安朝の漢詩文を専攻し、日本上代・中古文学と中国中世(六朝)唐末文学との比較研究に一時代を画したが、江戸・明治の漢詩文と中国近世文学にも精通し、鵬外文学にも高い関心を示し、鵬外語彙が中国近世俗語小説や日本近世漢詩文の強い影響下にあることを指摘した。本書の漢詩の語釈にみる綿密な用語例の提示は、作者の用語の典拠を確定することを通して、創作意図に即した厳密な解釈を施し、且つ読書範囲・傾向を知りその言語世界に迫ろうとする小島氏の手法をうけつぎ、本書の一大特色をなす。

最後に、著者は現在、『後北游日乗』(明治十五年九月二十七日)十六年二月七日)の注釈に着手し、その第一報『後北游日乗』の漢詩(1)——旅立ち前後の詩——(『鵬外』六四、平成十

一年一月)をすでに発表している。著者の弛まぬ精進に称賛の意を表するとともに、近い将来の完結を期待したい。

(町 泉寿郎)

〔審美社・〒113-0033東京都文京区本郷五―一―五、電話〇三―三八一―四一五三、平成十一年二月十日、四六判、二三六頁、本体三、〇〇〇円〕

山田慶兒著

『中国医学はいかにつくられたか』

著者、山田慶兒氏は、京大人文科学研究所の中国科学史班、国際日本文化研究センターでの私の恩師である。山田先生は京大理学部天文学科の御出身で、広汎な科学史に取り組まれ、『朱子の自然学』『混沌の海へ―中国的思考の構造』『夜鳴く鳥―医学、呪術・伝説』『授時暦の道』『科学と技術の近代』『制作する行為としての技術』『本草の夢と錬金術と』『黒い言葉の空間―三浦梅園の自然哲学』『復元水運儀象台』、共同研究の編著としては、『歴史の中の病と医学』など多数の御著書がある。

一九九七年日文研を定年退官されて、過去四十年間の中国医学に関する研究、文献の読みこみの成果を一本にまとめられた。これが間もなく上梓される「中国医学の起原」である。「中学医学はいかにつくられたか」という今回の出版は、いうなれば、ダイゼスト版である。しかし単なるダイゼストではなく、強調すべき点は、強烈な筆致で述べられている。著

者が個人で又、共同研究で読みこまれた成果が、はつきりと打ち出されている。初めて接せられる人には、やや難解な点もあることと思われるが、長年古典に取りこんでこられた方には、画期的な新鮮な興味をそえられることであろう。中国医学は戦国時代に誕生し、後漢末までの五百年の間に理論と技術ができ上り、独自の医学の形をつくり上げた。航空機にたとえると、戦国は離陸期、漢代は急上昇期であり、魏晋時代に安定飛行となる。それぞれの時代の人びとは、古典の中にそれぞれ異なつた風景を見てきた。

その内容は、一、医学の歴史のはじまり 経験起原説か、文化英雄による創作か、聖人か、淮南子(BC二二〇)の中の神農か(神農は三皇「伏羲、女媧、神農」の一人である)、黄帝か(黄帝は五帝「黄帝、顓頊、帝嚳、堯、舜」の一人である)。

二、亀甲や獣骨に刻みつけた文字である甲骨文を読む。殷の時代の人が占って神意を問ひ、亀甲や獣骨に刻み、それを灼くと縦に一本の深い亀裂が、横に多くの細い亀裂が走る。その亀裂の走り方を見て占うのである。この走り方を見て占うのは王である。王が占ったことばを問ひのあとに刻む。後に実際におこつた結果をしたためた文字をつけ加える。

三、春秋左氏伝(BC三八六ごろ)には、春秋時代のことか述べられている。このころには病気を気の渋滞や閉塞とみなす考え方が生まれてきている。自然環境から病気が発生するという考え方もでてきている。また脈の拍動の異常に注目してきてきた。「病膏盲に入る」という言葉もでてくる。気概念

がでてきた。

四、出土医書 一九七三年、馬王堆三号漢墓から、足臂十一脈灸経などが出土した。大体BC二〇〇前後の写本であつて、著作年代は戦国後期までさかのぼる。この中には灸療法のことが書かれているが鍼療法の記載はない。また、経脈の祖系がでてくる。

五、『史記』扁鵲倉公列伝 前漢の司馬遷の著した『史記』には、扁鵲と倉公の伝記が述べられている。扁鵲は春秋戦国時代の過歴医を象徴する存在であつた。倉公は、淳于意が本名で、BC一八〇年陽慶から脈書、色診法を授かる。後に世界最初といえる診療カルテ「診籍」をつくつた。また六人の弟子を数えた。

六、黄帝内経 『漢書』芸文志では、医書が方技略に入れられ、医経、経方、房中、神僊の四類に分けられている。この医経の中に『黄帝内経』十八巻が記載されている。「黄帝学派」の最初の世代が著作活動をはじめたのは前漢の半ばごろと推定される。しかし現存する『黄帝内経』は、その七〇〇八〇%は後漢の初めに書かれたものと思われる。山田先生は『素問』の問答形式から年代順に黄帝派、小師派、伯高派、少俞派、岐伯派に分けられた。『素問』『靈樞』は鍼療法を主体とした書物である。

七、神農本草経 本草という名が記録に出るのはBC三三一年である。『漢書』には、この年、都の長安に集まっていた本草待詔を帰郷させた。とある。陶弘景(A D四五二―五三六)

が『神農本草経集注』を完成させた。

八、難経 『傷寒雜病論』の張仲景の序文の中に「八十一難」の名前がでてくるので、それ以前の著作であることは間違いない。『内経』の中の鍼法の部分を体系的に集約化したものである。

九、傷寒論 実在した個人の名を著者とした最初の医書といえる。張仲景により中国医学は確立したといえる。しかしその風景はまことに種々雑多である。

十、魏晉南北朝隋唐の医書 王叔和の『脈経』と、皇甫謐の『鍼灸甲乙経』が漢代の医家の綜合、再編としてあらわれた。唐代には『千金方』『外台秘要』があらわれた。

これらの内容について山田先生独自の解釈が述べられていて興味津々たるものがある。

膨大な内容の医書に没入している時、時に眼をあげて、この書をひもとけば、一つの羅針盤のような役目を提供することも知れない。

(高島 文二)

(岩波書店・東京都千代田区一ツ橋二一五―五、電話〇三―五二一〇―四〇〇〇、平成十一年一月、岩波新書、二〇七頁、本体六六〇円)

## 特別展 西洋重要古医学書100冊

(二宮陸雄所蔵本および東京大学所蔵本)

主催・会場 東京大学医学図書館

平成11年10月4日(月)-10日(日). 10時より6時(入場無料)

●

今年はジェンナー牛痘種痘到来150年、お玉ヶ池種痘所がやがて新政府の大学東校になって130年になります。これを期に二宮陸雄所蔵本に東京大学の所蔵本を加えて展示します。展示古書はヴェサリウスの『人体構造論』、ヒポクラテス、ガレノス、ケルスス、ディオスコリデス、ハーヴェイ、ファロピオ、マルピギー、パレ、パラケルスス、デカルト、ブルーフ、ウイリス、エウスタキオ、パストゥール、ベルナル、フィルヒョウ、シャルコー、プロカ、ピネル、フロイト、ナイチンゲールの著書、ワトソン・クリックの二重螺旋論文などを含み、医学部の発端となった種痘所関連の貴重な古史料や日本の世界古地図も展示します。